

いては「システムがほしい」とか「持ちたいと思う」とか単にそう言って頂くだけでは一步も進まないということを改めて申し上げたい。筆者のいいたいことは、筆者は10年来そうしたことをやってきているが、現代気象学に極光の専門的知識が必要だと思ったかたがたが自分でその勉強をして貰うことが最も確実な方法なのである。もっともらしい話だけならば、誰でもしゃべれるが、それを実行することと単なる話との距離ははなはだ大きいので、発言者中には駒林、嘉納両氏の如き優秀な惑星大気高層物理の専門家が居られるので、この点を特にお願いしたいと思う。というのは、現在地球電磁学会に気象学会会員が何名出席しているであろうか、そうした簡単な実践なくしてその分野との交流は不可能であろう。

「地区研究」の問題は気象庁の技術向上のためにも極めて重要な問題であって、そのためには「気象研究所」のあり方を十分に検討する必要があるが、いまのところこれについては一応筆者の所管外として「にげ」しておくことにしよう。ただ、最後にもう一言いいたいことは、気象学会も年々会員増大をつづけて益々盛大に向いつつ

あるようで、結構なことには、春秋の大会発表論文は3会場3日間を費してなお十分とはいえないと聞いている。しかし乍ら、不思議なことに、それだけ多数の論文が読まれ、大冊の予講集が出されながら、活版印刷として正式に publish されるものが非常に少ないことであって、この問題についての明解な答を例えば上記座談会発言者の如き有識者に伺いたいと思っている。伝説といえ、英文原稿が和文原稿にまさるといふほど大時代的な意見も払拭されきっていないようであるが、米気象学会(AMS)のBibliographyが定常的にとっている気象学関係論文で日本人著者の最大多数は「研究時報」からであることを申し上げて拙文の筆をおくことにする。もっとも、数が多いということが優れていると同義でないことは、いうまでもなく先刻読者も承知のことと、いわれぬまえにしておく。しかしAMSが文献に取上げることのなかには、ある程度ベリフィケーションが含まれていると解してよいと筆者は考えているのである。

(16 April, 1970)

## 第15期第7回理事会議事録

日時 昭和45年5月26日(火) 18.20~20.50

場所 気象庁予報部会議室

出席者 山本理事長、大田、小平、大井、神山、岸保、北川、各常任理事、孫野、高橋、磯野、山元、中島、沢田、武田、須田、日下部、各理事  
関口監事

列席者 伊藤(博)大会委員長

### 議題

議決事項:

1. 総会準備について
  - 理事長あいさつ要綱案
  - 昭和44年度事業経過報告要綱(案)
  - 同 決算書
  - 同 会計監査報告
  - 昭和45年度予算書(案)
  - 同 事業計画要綱(案)
 気象学長期計画について若干修正の上承認された。  
 次期当番支部について  
 北海道支部とし秋季を担当してもらう。

原案どおり承認された

2. 松永賞候補者推薦について(北川理事提案)
  - 光田寧(京大, 防災研)を推薦する。
  - 題目「超音波計測計の製作とこれを利用した下層大気の研究」
3. 第16期理事会への引継事項
  - (1)昭和46年度当番支部は札幌(秋季大会)とすること。
  - (2)賛助会員獲得を推進すること。
  - (3)賛助会員増加を勘案し支部交付金の増額等を考慮すること。
  - (4)外国文献集刊行を推進すること。
  - (5)正野重方記念論文集刊行を推進すること。
  - (6)学会々場費については本部と支部で打合わせて決定すること。
  - (7)学会奨励金は今年度より実施すること。
  - (8)気象学長期計画を立案すること。
  - (9)「70年代の科学研究, 学術体制ならびに日本学術会議のあり方」について討論すること。
  - (10)予算決算のまとめ方について研究すること。
 承認事項: 通常会員川上政弘外9名の入会を承認。